

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「保護者の本当の気持ち」

来年度の就学先に悩む年長児と、その保護者を対象にした学校見学が一段落しました。改めて、夏休み前の忙しい中、学校案内をしてくれた小学校と能代支援学校の関係者に感謝しています。すでに就学先を決定した保護者がいる一方、検査結果を待ってから決断しようとしている保護者やまだ答えを見付けられずに悩んでいる保護者とは、再度教育相談を実施します。今号では、学校見学を通して感じた保護者の思いを紹介します。

### 1 特別支援学級入級か特別支援学校入学で悩んでいる保護者

- ・保護者は、園の友達と離れたくない、兄弟と同じ小学校に入れたい、適応できるか不安だが挑戦させたいなどの理由で、地域の小学校に入学させたい気持ちがとても強い。
- ・特別支援学級に入ると、周りからからかいやいじめの対象になるのではないかと、兄弟にも影響するのではないかと心配している。
- ・特別支援学校は毎日の通学が負担になるので、職場に迷惑をかけるのではないかと悩んでいる。仕事を変えなければいけないと考える保護者もいる。
- ・特別支援学校から小学校に転校した例はあるかと質問を受けた。親はいつかはみんなと同じように成長するという願いをもち、それが子育てを支えている。

### 2 特別支援学級入級か通常の学級（支援員配置）、通級による指導で悩んでいる保護者

- ・保護者は、支援員を配置してもらい、加えて、通級による指導を受けながら、通常の学級で学んでほしいと強く願っている。
- ・発達検査を受けたが、数値だけでは発達レベルがよく分からない、小学校生活にどの程度適応できるのかイメージできないなど、期待よりも不安な気持ちが多い。
- ・父親は楽観的に、母親は悲観的に考える傾向があり、両者に意見の食い違いが生じている。

ほとんどの保護者は、通常の学級からスタートして、もし個別指導が必要になってきたら、通級による指導、特別支援学校や特別支援学級を検討すればよいと考えています。しかし、子どもがつまづいてから学びの場を変えるのは、子どもの自己肯定感を損なうことがあります。発達障害の子どもの中には記憶力が優れており、辛い体験を鮮明に覚えてしまうため、小学1年生のときの挫折がトラウマ体験になってしまうこともあります。また、通常の学級で学ぶのが難しいと感じても、年度途中で学びの場を変えることは難しいです。

学校は子どもが頑張っている場所ではなく、頑張らなくても十分学べる場所であるべきだと思います。私は保護者と相談する前に、必ず園で遊ぶ姿や友達と関わる様子を見たり、検査結果を基に子どもの発達レベルを把握したりしています。その上で、最初に手厚い指導・支援を受けられる学びの場からスタートすることを勧めています。通常の学級で始める場合には、支援員配置や通級による指導等、「居場所」をつくることを提案します。特別支援学校を勧める場合は、学校見学に同行し、保護者の不安を少しでも軽減できるようにしています。客観的な情報を伝え、保護者が答えを見付けられる相談を心掛けています。



**とれたて直送便**



「大事なことは、はじめに時間をかける」

二者面談がスタートし、検査依頼が増えている。就学に絡む場合は診断書が必要になるため、病院等で検査をすることが望ましい。特別支援学校や特別支援学級を勧める場合は、保護者と子どもの心情に寄り添い、はじめに時間をかけてボタンのかけ違いを防いでほしい。